

2.1.4.真宗の給仕式にみる葬祭領域の情報化

土居 浩

序論

小稿はプリント班の今年度報告として、真宗大谷派（東本願寺）の「お給仕」にまつわる概説書の系譜を手繕る試み、現在の東本願寺出版が推す手引書である『真宗の仏事：お内仏のある生活』のうち葬祭領域に関わる項目を検討する。

昨年度報告「オンラインショップにみる葬祭領域の印刷物について」の結論部分では、次なる課題として、ビジネス用語が流通する現在の「供養業界」においても必要不可欠な、ビジネス用語とは異なる語法の印刷物を検討する必要性について、論述した。その一例として、真宗大谷派（東本願寺）の「お給仕」にまつわる概説書について、言及した。それを承けて、小稿では前掲『真宗の仏事』を主に取り上げる。

本論

真宗の仏事

『真宗の仏事』の副題に「お内仏のある生活」とあるように、世間でいう「お仏壇」の「お備え」のことを、真宗門徒は「お内仏」の「お給仕」と呼ぶ。東本願寺出版による編集発行の『真宗の仏事：お内仏のある生活』は、2013（平成25）年11月28日に初版第1刷が発行された。今回参照したのは2021（令和3）年7月15日発行の第8刷である。なお現在、東本願寺の御影堂門と阿弥陀堂門に挟まれた総合案内所（お買い物広場）では、この『真宗の仏事』と並んで『浄土真宗 仏教・仏事のハテナ？』（東本願寺出版、2017年）が平積みされており、両書ともに手引書としては決定版的な扱いとなっている。

本書「あとがき」には、刊行の経緯が説明されている。曰く、1966（昭和41）年に初版が刊行された『お内仏のお給仕と心得』（東本願寺出版部）は、数十年が経過してなお活用されてはいるが、言葉遣いや生活スタイルの変化もあり、「新しい書籍の発刊を願う声をこれまでいただいて」きたところに、東本願寺派の真宗同朋会の機関紙『同朋新聞』で「真宗の仏事」と題された記事が2007年9月号から2010年12月号まで連載され、それに基づき制作されたのが、ここで取り上げる『真宗の仏事』である。地域差・年代差があることを承知した上で、本書は「できるかぎり基本とされるかたち、現代に広く用いられているかたちをもって」編集したという。

『真宗と仏事』は、大きく6章で構成されている。具体的には次のとおりである。なお「勤行」とはいわゆる「おつとめ」である。また「帰敬式」は「おかみそり」とも呼ばれ、仏弟子となるため三宝に帰依し法名を授かる儀式のことである。

- お内仏の荘厳
- お内仏の仏具とお給仕
- 平常の勤行と作法
- 帰敬式と法名
- 葬儀・中陰・年忌・月忌・納骨
- 定会法要（年中行事）

総じて、仏壇（お内仏）をいかに整えるか、常日頃と特別な儀式の際それぞれで仏壇に何を備えるか、等々が説明されている。その流れの一つとして、葬儀その他の死者に対する応対が説明される。その点、真宗の作法が、いわゆる位牌の存在を前提とした死者供養と異なる点は、改めて確認しておくべきであろう。

『真宗の仏事』において位牌については、前掲した「帰敬式と法名」の、特に法名について説明する際、言及される。真宗では受戒をしないので「戒名」ではないこと。東本願寺派では法名を軸装した法名軸を仏壇（お内仏）の右側面に掛けるか、折本式の法名帳（いわゆる過去帳）を置くかすること。そして、法名を記した位牌が置かれることもあるが、その起源は儒教にあり、「本来、真宗では法名を位牌に記すことはありません」と記される。前掲『仏教・仏事のハテナ？』ではより直截に「位牌は用いません」との小見出いで簡潔に明言している。

位牌を用いない真宗において、では葬祭領域はどのように印刷物に書かれているのだろうか。

真宗の葬儀

『真宗の仏事』では、葬祭領域が「葬儀・中陰・年忌・月忌・納骨」章で取り上げられている。各節および節が含む小見出しあは、次のとおりである。

- 葬儀について
- 葬儀に関する諸式
 - 命終に臨んで
 - 枕飾り
 - 枕勤め
 - 納棺

- 葬場の莊厳
- 通夜
- 葬儀
- 灰葬・還骨勤行
- 中陰
- 中陰中のお内仏
- 中陰中のおつとめ
- 満中陰（四十九日・忌明け）
- 葬儀にかかる「迷信」
- 法事（年忌法要）
 - 年忌法要・祥月命日の莊厳
 - 年忌法要のおつとめ
- 祥月命日と月忌
- お墓について
- 真宗本廟収骨
- 大谷祖廟納骨

以下、各節の内容を略述する。

「葬儀について」節では、冒頭「各地の真宗門徒の生活習慣のなかで、葬儀はもともとお寺を中心に地域の人たちが寄り合ってつとめられて」いたと書き出され、現在では寄り合ってつとめることが難しくなっていることが指摘された上で、葬儀の意義が説かれる。

「葬儀に関する諸式」節で、詳細な小見出しが列挙されているのは、1972年に宗派が告示した「葬儀並びに葬儀前後の行事について」に基づいて書かれているからと思われる。なお、「灰葬勤行」とは火葬場で拾骨した遺骨を骨壺に納め葬場で執り行われるおつとめのこと、「還骨勤行」とは帰宅して仏壇（お内仏）に安置した遺骨を前に執り行われるおつとめのことである。

「葬儀にかかる「迷信」」節では、「清め塩」や「友引」についての見解が示される。

「法事（年忌法要）」節では、一般的には追善供養と考えられている法事を、浄土真宗としてどうとらえるかについて、親鸞の言葉が引用・解説される。

「祥月命日と月忌」節では、もともと「祥月」は儒教から来ていること、また親鸞・蓮如の命日と関連付けて説明される。

「お墓について」節では、今日の人々の暮らしでは「墳墓の地」を離れて新たな生活の場をもつようになっていること、それで「つながりを失い、不安が強くなつて」いること、それが「お墓や葬送について、さまざまなり方を志向させて」いるとの見解が示される。

「真宗本廟収骨」節では、東本願寺（真宗本廟）に納骨できることが紹介される。

「大谷祖廟納骨」節では、本願寺歴代の遺骨、そして全国各地の門徒たちの遺骨が納められている大谷祖廟が紹介される。

一方、前掲『仏教・仏事のハテナ？』は、葬祭領域を「葬儀・法事とお墓のハテナ？」章にまとめ、次に列挙する節で構成している。

- お焼香
- 弔電・弔辞
- 迷信—清め塩
- お墓
- 通夜・葬儀
- 中陰
- 法事・年忌法要
- 法事での持ち物・服装
- 金封の表書き

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ？』と、それぞれが取り上げる葬祭領域の話題について比較すると、『仏教・仏事のハテナ？』の方が、より初心者・一般向けの著述となっている。たとえば『仏教・仏事のハテナ？』の「弔電・弔辞」節では、真宗では「冥福」を用いないことが解説される。「迷信-清め塩」節では、清め塩や、茶碗を割る風習を取り上げ、「さまざまな迷信に惑わされている我が身が照らされ」と指摘される。「お墓」節では、墓相・方角・日の良し悪し、また墓の大小にとらわれる必要がない、と明言される。このように『仏教・仏事のハテナ？』では、「真宗ではこのようにする／しない」の明言・断言が多く、きわめてわかりやすい。

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ？』と、両者に共通する葬祭領域の話題として、通夜と葬儀がそれぞれどのように説明されているか、比較しておこう。『真宗の仏事』の「葬儀に関する諸式」節が含む小見出しあり、先に列挙した。『仏教・仏事のハテナ？』の「通夜・葬儀」節が含む小見出しあり、以下のとおりである。

- まずは、お寺に連絡を
- ご遺体を安置する部屋は？ 向きは？
- 納棺の際の衣服は？
- 葬儀の日取りは？
- 葬儀壇はご本尊を中心に
- 迷信に惑わされることなく

『真宗の仏事』と『仏教・仏事のハテナ?』とを読み比べると、同じことを別の角度から説明しているように読める。両書の違いを強調するならば、『真宗の仏事』に比べ、『仏教・仏事のハテナ?』は葬祭領域の中でもより俗事に関わる事柄を説明している。一方で『真宗の仏事』では、真宗的意義の説明が、より前面に出ている。とはいえた全く異なることを述べているわけではない、『真宗の仏事』では問われない前提のような領域（これを先に「俗事」と指示した）を、『仏教・仏事のハテナ?』は力点を置いているのである。また『真宗の仏事』がその副題「お内仏のある生活」が示すとおり、基本的には仏壇（お内仏）があることを大前提に説明していると同様、『仏教・仏事のハテナ?』でもまた本家分家を問わず家には仏壇が安置されるべきことを説く。

この両書の相違は、葬祭領域における「情報化」を考えるに際し、きわめて示唆的である。誰に向かって何のための情報化なのか、という問題である。これは、活字の印刷物として流通している文字情報をデジタル化してインターネットに載せる云々とは、まったく次元の異なる問題意識である。今回の研究調査プロジェクトにおける根本問題でもあるので、この小稿ではひとまず『真宗の仏事』の系譜を歴史的に遡及して概観することで、最終年度への見通しを得たい。

結論：給仕式の系譜（最終年度への展望）

先にみたように『真宗の仏事』は、先行する『お内仏のお給仕と心得』を念頭に置いているが、その系譜はさらに遡及できる。管見の限り、現時点で次に示す系譜が確認できる。

- 『御給事式：在家内仏』1846年（弘化三年）
- 『明治おきうじ式』1898年（明治31）
- 『お内仏のお給仕と心得』1966年
- 『真宗の仏事：お内仏のある生活』2013年

キーワードは「内仏」そして「給仕（給事）」である。家内に安置した仏壇（お内仏）へのお備え（お給仕）をいかにするか。これを説明するのが「お給仕式」である。

詳細な検討は次年度になるが、より古い給仕式では式次第のみであり、時代が新しくなるに従って、葬儀の意義などを説く分量が増える点を、指摘しておきたい。すなわち弘化年間刊行の『御給事式』では、葬式の項目において、葬式の意義などは全く言及されず、仏壇（お内仏）の莊嚴をいかにするか、勤行で何を唱える（読む）か、その点のみが淡々と列挙される。これが『明治おきうじ式』になると「一生の大礼なれば力一杯大切に吊（とむらふ）へし」と一言が付される。『真宗の仏事』については、すでに見てきたとおり、詳細に意義が説かれる。

現時点での見通しとしては、この給仕式の変化を、時代による情報化の質的変化としてとらえることが可能ではないかと考えている。ここでいう「質的変化」とは、素朴な意味での、新しいメディアが登場した、といった技術史的観点とは異なる。もちろん、類似出版物の量的激増である等々を意味しない。何をすることが「情報化」なのか、との問いかけでもある。プリント班・インターネット班を架橋しうる課題意識を念頭に、最終年度に取り組みたい。